



年頭のご挨拶

(社)日本測量協会北陸支部長

鹿田 正昭

新年明けまして、おめでとうございます。

平成22年（2010年）の年頭にあたり、皆様とともに謹んで新春をお祝いいたします。

(社)日本測量協会、とくに、北陸支部の皆様方には平素から測量系を含む地理空間情報を中心として、絶大なご支援とご協力を賜っておりますことに対し、衷心より御礼を申し上げます。

昨年は映画「劔岳 点の記」に始まって「劔岳 点の記」に終わったといっても過言ではないと思います。東映株式会社プロデューサーの角田朝雄氏による「奇跡の映画「劔岳 点の記」(月刊測量10月号、11月号)」によれば、240万人以上の方々が鑑賞されたとのことでした。角田氏は「作り手である我々には確実な手ごたえがありました。ただ、出来がよくともヒットするわけではありません」と述べられています。正直言って、測量という地味な技術が題材となる映画では、それを生業としている方々にとっては思い入れがあり期待するところ大ですが、一般の方々にとって「測量」はどれほど興味あるものかは未知数です。

それが、このように大ヒットを成し得た背景には、木村大作監督の「本物の映画作り」にかかる信念および執念があったからこそであると感じました。製作過程に関わるご苦勞は製作委員会のホームページや機関紙等で詳述されていますので割愛しますが、監督は自ら車を運転して全国の映画館やメディアを90日間かけて廻られたそうです。大ヒットはその執念と「本物の映画を作った」という自負の現れであり、沈滞化している測量界にとって映画「劔岳 点の記」の製作は幸運な出来事であったと思います。

私も映画館で3回、海外出張の往復の機中で2回の合計5回鑑賞する機会がありました。映画館での1回目はただただストーリーの流れと映像の雄大さに感涙して終わったという感じで、肝心の「測量技術者」の仕事の重みを感じるまでには至りませんでした。そこで、2回目の鑑賞では自然の雄大さもさることながら「劔岳 点の記」の測量技術を感じるよう鑑賞しました。鑑賞後に思ったのは、この映画は、是非、学生に見せたい、あるいは見てもらえなくても何かを伝えたいと思い、映画に関するクイズ(後に月刊測量の非公認『劔岳 点の記』検定として紹介)を考え、学生には映画鑑賞を薦め、定期試験問題に『劔岳 点の記』に関するクイズとして出題しました。3回目の鑑賞は出題したクイズの解答を確認するためでした。鑑賞できなかった学生には先月発売されたDVDを活用し、後学期中に測量学特別講義として見てもらう予定にしています。

映画を観賞している方々の年齢層を観察していると、確かに年齢は高いと感じましたが、若いカップルや親子、祖父母とお孫さんのような姿も多くありました。そういった方々に少しでも測量に対する関心を持ってもらえれば別の意味でこの映画の価値があったのではないかと推察しています。

今年の年頭のご挨拶は「劔岳 点の記」一色となってしまいましたが、今年の夏、政権が交代し「コンクリートから人へ」をキャッチコピーに測量をとりまく環境はますます厳しさを増していくように思います。一方、地理空間情報活用推進基本法に関連して「地理空間情報活用推進に関する北陸地方産学官連絡会議」が発足し、日本測量協会北陸支部もその一翼を担うことになりました。北陸地方測量部を中心として北陸地方整備局、各県自治体のご関係の皆様方からのご支援・ご協力を切にお願いする次第です。

最後になりましたが、(社)日本測量協会の今後の益々の発展と会員皆様方のご健勝とご活躍、さらにご家族の皆様のご多幸を祈念して、年頭のご挨拶とさせていただきます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

金沢工業大学環境・建築学部
環境土木工学科 教授